

わだちのなかの鮒

わだちは「輪ノ道」。車が通つて跡にのこつた道のこと。雪道などに車がとおつて出来た車の跡。歩きにくい。中国の故事に「轍鮒ノ急」(テップの急)。轍(わだち)にできた水たまりに住む鮒(鮒)。ニッヂモサツモならず喘いでいる様。差し迫つた困難に陥つて難渋している様(「莊子」)。

インドでは「末法濁世」(マッポウジヨクセ)と云う。既にお釈迦さまはいない。その

説いた教えも、一緒にその道を進もうとする同伴者もない。最終的には独りぼっちで生きなければならぬが指針も指導者もない。誰の支えもない。

そこを私たちは今どう生きているのか。

「依怙地」(えこち)に生きてきて行くしかない。「依怙地」とは我が身勝手な地平にたつて生きるしかない。自己判断。自分の甲斐性で生きて行くしかない。ことばを変えて云うと「自己の主体性」を離れては生きられないのだ。仏教では「煩惱生」と云う。

「煩惱」とは「何」。一〇八とかぞ

えるが、最少、貪慾・瞋恚・疑い・愚痴など。その代表格が「慢」。「慢」とは他の者と比較競争し他を見下す差別して、我が身を誇り高ぶって生きることを云う。いつでも、どんなときでも「われよし」「われ高し」として生きること。どんなに底に落ちても「あいつよりまし」と高ぶつて生きる。今時のことばでは「自己中」。ことの真実が見えないで(無明)自分の慢心にだけに依存して(渴愛)に生きる。

祖先をはじめとし無量の人の支えに支えられていっているのに、そのことを思わず

(無明)私の甲斐性でいきているように思われる。宇宙森羅万象に無限の関係に支えられて生かされているいのちであるのに、今日のいのちは今の私の力量と思う。

淨土真宗で「如來さま」とは何。タットハガーター。真実よりやつてくるもの。真実が真実の世界から田覚めよと、私に働きかけ迫つてくるその働き。これを如來の誓願とも本願とも仏力とも。「帰命無量

寿如來・南無不可思議光如來」と働く如來である。この如来のはたらき(仏力・他力)に

出会うこと、そしてそれをそのまま聞き、人のかの鮒のようなわたしのためのご本願」と歓喜する、そのことを親鸞様は「信心・心まことのこころ」と云われたのです。

春になつて春の日差しが厚い氷を破つた、その瞬間、今まで長い長い「依怙」の煩惱の闇に閉ざされていた私に目が開くと同時に、

如来のご本願の呼び声が聞こえて来るので、それを「信心開発丸」(しんじんかいほつ)と云うのです。

「有為の奥山けふ越えて 浅き夢みじ 醉ひもせず」。「涅槃」・「浄土往生」とはかいほつ)と云うのです。

このことを云うのです。

にもかかわらずわたしたち「轍鮒」は依然として自己本位の煩惱のなかにあります。自

分の浅はかな知識を捨て切れずして、たとえば「如來さまってどんなお姿?」「わたしが自分の信心をしないと、如來さまには出会えないの?」など、人間である間迷い苦しむかも知れません。

真宗には偶像信仰はありません。「南無阿弥陀佛」のお呼び声をあなたが称えてそれを聞く、それだけ。

「生涯泥凡夫と懺悔しないと本願には出えませんか。」

親鸞様はご本願の呼び声が聞こえてきたなかで、ますます自分の愚禿なことをしらされ、そのなかでますます本願の貴さをお喜びなさったのでしそう」このあたりの聖人自らの心情絶縁を歌われたのが晩年のご『和讃』です。

春彼岸会法要

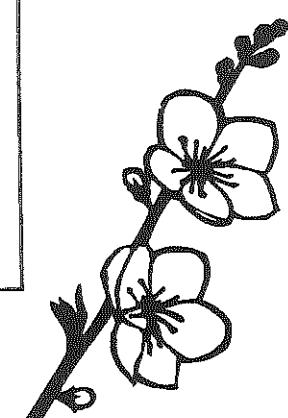
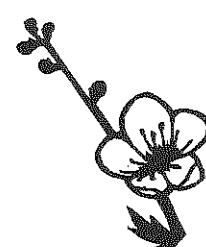
3月20日(火・春分の日)

午後2時より

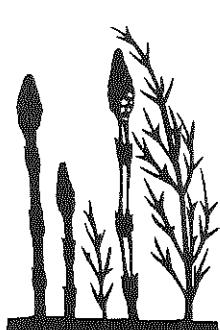
おつとめ(正信偈和讃)

法話

~~みんなさんでお参りください~~



	葬儀	二月十二日
川原	龟井幸男様	八十七歳
小谷	宮嶋真一様	八十七歳



(敬称略)

三月 勝林寺 予定	二日(金)	三日(土)	四日(日)	五日(月)	三日(土)	四日(日)	五日(月)
龜井博文宅	三七日	山田弘之宅	一周忌	永井哲雄宅	三七日	関川 永宅	一周忌
出石組 基推							
一〇日(土)	龜井博文宅	三四回忌	一六日(金)	龜井博文宅	五七日	一七日(土)	谷原重規宅
							三・十三回忌
一八日(日)	藤田正吾宅	一周忌	一七日(土)	出石組 三役会			
二〇日(火)	永井哲雄宅 忌明						
二一日(火)	春彼岸・合同役員会						
二三日(金)	龜井博文宅	六七日	二四日(土)	藤本 勉宅	一周忌	二五日(日)	出石組 組内会
二六日(月)	華光法話大会		二六日(月)	みのりを聞く会		二六日(月)	
三〇日(金)	龜井博文宅 忌明		三〇日(金)			三一日(土)	田村哲夫宅 一周忌

「ことたま」(言魂)・

どの民族でも同じだが、原始時代には、ものにはすべて「たま」といつて目には見えない不思議な力(靈力)があると信じられていました。ことに「言葉」には「言魂」といって特別貴い力があると信じられていました。民族学の上では「言魂信仰」と云われている。

たとえば、めでたいことばでものや人をほ

める(言祝ぐ)ことを勧めます。『万葉集』一巻に天皇が統治の大和の国を、一望に見はるかす香久山に登りたちて「国見」をしたときの長歌(國ぼめ)がある。

「大和には群山(むらやま)あれど、取りよろふ 天の香具山 登りたち国見をすれば 国原は 煙り立ち立つ 海原は 鳥立ち立つ うまし国ぞ 安芸津島 大和の国は」。

一年に一度、日を決めて「国見」を行い、「國ぼめ」をすることは統治者のつとめであつた。また、人を褒め、ものを言祝ぐことにより、その占有統治などを示そうしたのでしよう。

「標める」とは所有・占有を現す言葉です。「標繩(しめなわ)」(標縄)とは「この危険な力ある人」などを示す立ち入り禁止の繩です。怪力あるお相撲さんのような人も、祟りのありそうな大木や神域などにもこの「しめなわ」を張りました。出入り禁止の印しです。

天智・天武の兄弟の天皇が額田王(ぬかだ

のおおきみ)という一人の美女を争ったときの有名な歌。(万葉集一)

茜さか 紫野行き 標野(しめの)行き
野守りは見ずや 君が袖振る

紫の匂へる芋生とを 増くあらば 人妻ゆえに われ恋いめやも
滋賀県蒲生には紫草(薬草)など染料や薬草栽培された天皇直轄のご領地がありました。

その薬草苑での恋の火花です。

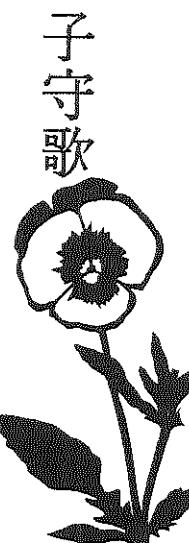
「名乗り」「名前」も、今のように人を呼ぶ符号のようなものではなく、ひとの全人格を示す重大なものした。名を名乗ることで私の人格を挙げて求婚すること。その求婚に答えてわたしの姓名を明かすのは求婚承諾ほどの重大な事でした。それは『万葉集』巻頭の一首をみても分かります。

籠(こ) もよみこもち ふくしもよ みふくしもち この丘に 菜摘ます児 家聞かな

のらさね……。自分を誇示するために相手を軽視したようにひとの姓名を軽々しくあんいにフルネームで呼ぶのは大変軽率不遜なことだと知らなければなりません。

このように古代ではどの民族にも「御靈信仰」があり「除霊行事」(おはらい)「修祓」(しゅうふつ・しゅうはつは慣用読み)が、宗教そのものであるかのような誤った認識が現代まで伝わっているのは、日本が「宗教的後進国」と呼ばれる証左です。

淨土真宗は、「おはらい」をしたり「祈願祈祷」はしません。では葬式・法事は何のためでしょうか。考えてみて下さい。



子守歌

私自身は すくなくとも母から歌つてもらつた覚えはないが 五歳ほど年下の弟が赤ん坊のとき母が歌っていた歌はうろ覚えだが今も耳の底に残っている。

「柴の折り戸の賤ヶ家(しずがや)に 翁(おきな)と嫗(おうな)が住まひける。翁は山に柴刈りに 嫗は河に網すすぎ。流れながら水の瀬に 流れ来れる桃の実の世にたぐいなく太ければ おしきに据えてめ

するうち…男子(おのこ)子ひとり出でにけ
る…。」

小柄な母が櫻をかけて働く姿はいまでも鮮明に覚えている。昔はそのように古典的であった。

七草

一月七日は「春の七草」。二月三日は「節分」、其の次の四日が「立春」、そして三月三日は雛祭り季節は春へと動いていく。これは今も昔も変わりはない。

だがどうも昔と今とでは、そのなかみが違うようだ。しかしそのありようはかなり変化して來ている。

家庭では「豆まき」はしなくなつた。かわりに「太巻き鮓」をスーパーで買ってきて恵方を向いて丸かぶり。なんとも品がない。

ことに七草。春立つとはいゝ「寒」の真っ只中。わたしの産みの母(昭和9年没)は、毎年「春の七草」を子供に云つて聞かせた

芹・ナズナ・じぎょう・はごべら・ホトケノザ・鈴な・すずしろ・これぞ春の七草」

「ここいらではまだ寒いで皆なそろそろへんけどなー」

そんなふうにおしえてから寒い台所にたつてマナイタの上の草を包丁の背でトントンたたいて。このように歌つた。

「七草なずな(とうど)唐土の鳥が 日本の国に 渡らぬ先に 七草祝わお」



勝林寺仏教婦人会便り

二月十一日、勝林寺の仏教婦人会評議員会が開催されました。各地区の評議員さん総勢三十余名にお集まりいただき、本年度の行事計画や予算をご審議いただきました。また、今年は、役員改選の年であり、以下の新役員の方が承認されました。

会長 濱嘉子さん(上小田)
副会長 齋藤典子さん(上小田)
会計 渋谷順子さん(唐川)
数森成美さん(正法寺)
事務局 山田仁美さん(松枝)
齋藤洋子さん(上小田)
藤川貴恵さん

会員 岩上加代子さん
齋藤昌子さん

連盟評議員

平野睦美さん

二年間の任期で、仏教婦人会のお世話を引き受けいただきました。会員の皆様には、よろしくご協力くださいますようお願いいたします。

また、当日は「ダーナの日」であり、長年わたしたちを導いてくださる八十八歳以上の方に、今年もささやかなプレゼントをお手紙とともに届けました。

先日は、その中の正法寺の数森三男様敏子様(夫妻より)丁寧なお礼状をいただきました。もつたいなくありがたいことでした。

